

更して、如上の危難を遁れんとした。即ち大正七年三龍社を大資本家とする三万圓の合資組織成り水田氏は之が支配人となつて奮闘努力、漸く先途を見極める体の位置に引上げるに至つたのだ。爾後大戦中の好潮に竿さして莫大の利益を上げたが、三万圓の合資會社では自由を欠くこと多く、遂に大正十二年六月本多吉郎氏を社長とする資本金八萬圓の株式會社に變更し、同時に従來の貸びきを廢して獨立生糸工場に改め今日に經過して居るが利益は大部固定資本に注入する關係上未だ配當は三四朱の程度にある。目下八十五釜、生品は大部桐生八王子前橋福井等へ出して品質の優良を認められて居る積立金は二回にて四百圓、一ケ年の生産額は三十万圓内外であると。因に昨今準備工事も大部整つた故、今後は相當の配當を續けるであらうと眺められて居る。

齒科醫 鈴木謙次

碧海郡安城町

碧海郡齒科醫副會長として同業者間にも相當の信望を繋いで居る鈴木氏の齒科醫院は、名古屋は兎も角岡崎市内の同業醫院に比して格別の粗雑さを示して居るが、此手腕は確であつて、患者も日夜相當の影を見せて居る。何うせよテ／＼装つた室内の諸經費を一般患者の懐中から吐き出させる現在の諸營業が、芳ばしくないとすれば、勢ひ此種の質素なる診察所を作る以外に仕方がない。殊に土地が

安城と云ふ小さな町然かも肝心の町民が室の立派なものより藥代其他の安直なる方を欲するから心無きにあらねども己む無く斯くして居るのでなからうか。ソレども他に理由があつてか等……言はぬは云ふに厭や優る。氏は本年二十九才、大正八年に東京の日本齒科醫學専門學校を卒業して約一年半同校附屬病院に勤務し斯術の研究に携つたが、同十年歸郷と共に現在の處に開業したものである。性淡泊にして厭や味なく、町民にも相當可愛いがられる爲めに漸次患者を吸収し今では中位を制し、次第に先輩の牙城へ迫らんとする情勢にある。趣味は囲碁但し三級程度の親父には四つに組めなかつたと云ふからザル碁の範疇を脱したものと云へまい。

糟谷平一郎

幡豆郡横須賀

杉浦銀藏氏は百萬の借金が出來たと稱して祝盃を擧げた。糟谷氏は借金が五十萬圓となつたなれば一夕地方のお歴々を招して、ごんちやん騒ぎを演ずるといきまいて居る。五十萬圓の借金は百萬圓以上の資産がなければ出來ぬと考へたら、何等不思議もなからうではないか。氏は本年三十九才、昔から横須賀村萩原の大地主と知られた糟谷家に生れ、大正元年先代の後を繼承して、十年を一期に百萬圓の富を積まんと目論見た。而して、盛んに株に手を染めたが、大正九年の反動時代に、株價の大暴

落を眺めて、一躍二十七万圓を損失したのは、天運の見放しによるか。何れにしても丁半の目が利害を決する人生なれば、丁と出るも、半と出るも、今更詮じ立てたごとく仕方がない。併し人だもの損して浮び廻るものも無からう故に、氏も亦之が爲めに腎臓を病んだとて穴勝負者と稱することは出来なうであらう。爾後一時に發心して、百万の富を積むもよし、又同額の負債を積むも同じくよしと考へるに至つたのは、賽ころの性質を十分呑み込んだ結果にして、今日では只建築を道樂にする以外、差したる野心も無く経過して居るように思はれたが、事實はどうやら悠々自適の後捲土重來を策して居るらしい。而して氏所有の幡豆宮崎の別荘は三河灣一帶を眺望する点にあり、然かも此處をさつきの名所たらめんど、雅をこらして居るが伊勢紀洲より得たる石を据へつけて、目下風情を添へるに餘念がない。其爲めか糟谷と云ふよりも『石龜』と稱する方が村人には呑み込み早く、若しさつきの頃此處を訪れんとするものは石龜別邸と稱することを知らせて置くも筆者の親切氣から出たと感銘あれ。

岡崎高等
女學校長 柳原秀太郎 岡崎市梅園町

軍人が兵卒に威嚴を示す爲めだと稱して、殊更眉根に皺を寄せ、眼を三角にして得意がつて居たのは、差して古い癖でない。之に感化された譯でもあるまいが一時は人の上に据る程のものにて顔顰

ない者は一人もなかつたと云ふ嘘のような事實が、今でもボチ／＼掘り出されて來るから凄じい。別して嚴父を丸呑みに、小學校の先生達が、澁面作つて子供の姑息不活發になるを眺め、成程從順を教へる手段は之に限ると獨り悦に入る等は滑稽も通り越して了ふ者である處が岡崎高女の柳原校長は藥にし度くも、其氣配がない。却つて反對に日夜ニコ／＼生徒に面して、之に觸れる時は如何なる罪も惡も悉皆解けて了ふような寛容の面持を維持して居る。氏は校長としての經營的、事務的手腕には乏しきようであるが、他面學者肌の處がある爲め、此種のものに兎角多い編狭な様子があるかとも揣摩せられるがよし多少此習癖があつたとして、面貌態度の温容は、之を補ふて餘りがある。

明治十五年七月豊橋市に生れ、同三十九年東京高等師範の地歴部を卒へて、長野縣立大町中學に教鞭をとつたが、握美郡赤羽村の舊家先代の九郎八翁は疾くより氏の人となりに打たれて、愛嬢の養子とす可く廿五才の時サツサと之を貰ひ受けて了つた。斯くして氏は舊性を捨て柳原性を名乗つたが、大町中學は三年にして、岡崎高女に榮轉し、明治四十二年より大正八年校長となつて今日に至る十七年の水き間、常に修め、常に導く精勵振りに、感化されたる者は尠くない。其爲めに現在では嘗て教へしものを母に持つ生徒に、親子相傳の教育を施す等、好感を洩る事件にも逢着する故、益々自己の使命に、興味を感じて教養の道に寧日が無い有様である。併し氏は地面人としての存在理由を表示す可くヨリ善を憧憬する爲めに、其目論む處が稍理想に走る嫌ひがないでもないけれ共此理想に到達す

欠

岡崎市立商業學校教諭

下田雅徳

岡崎市籠田町

氏は明治十九年十二月二十二日と云ふ押し迫つた日に、長崎市新大工町で生れたが、其癖氣いそがしき点は少しもない。大正三年三月廣島的高等師範英語科を出でて直様水戸の茨城師範學校に教鞭をとりABCの手ほどきから、簡易なるリーダーを教へながら、此許破亂なき日を過ごして居つた。これ共高師へ道樂半分に入學するもの、稀有なる限り、氏の智識慾は卒業後も依然旺盛にして、生徒の教育に携る傍でも、決して語學の修養を怠らず、其向上に力めたが、殊に當時米人夫婦の宣教師が水戸市内に在住するを知り、之に款を通して、發音、會話の奥義を究めんと、放課後の時間を遊蕩三昧に用ひず、せつせ、彼等の許に通ふたものである。其爲めに好きと慾の調和宜敷く、上達は日を追ふて顯れ、今では發音に於て、英米人に伍するも何等遜色なき迄の明快さを把持し居る。「何んの：日本に巢食つて居て英語の修得をした者が外人の域に達する等は凄まじい」と誰が云ふ。日本人にして完全なる日本語を練るものが何人あるかを筆者は、斯様な悪口屋に反對に質問して見たい。同時に英語の本場英國人でも、スコットランドとアイルランドとの間には相當のなまりを發見するがさりとて折角習ふ希望者に、薩摩語を教ふるより假令ズーでも東北辯を教ふることも、教鞭握るものの責務

ではなからうか。用せぬ語學なれば、さなきだに科目多きに炊ふ生徒に、せめて會話だけでも除いてやることも、身の爲めとなる。

氏は斯く考へてのことか、否かは保証の限りでないが特に發音に留意して相當喧しく英語の一科目を担当して來た。而して岡崎商業に赴任したのは大正七年五月にして、爾來教頭の要地に就き竹内校長を輔佐しながら、生徒教養の任を完ふしつゝある。固より經營の才などは微細もなく、只學究的に盡すのみ差して擧ぐる程の餘技はない。

辯護士 内田慶治

岡崎市八幡町

辯護士と云へば、一寸おつかなく響く職業故に、之に携るお人柄も大抵相場がつくと早合點するは姑らく待たれよ。此に紅顔ではなけれ共無蓋の青年が、玄關番宜しく、「私が内田ですとアイサツ手輕に出て來た處を見ては、誰でも一時面喰ふものである。こと程左様に氏は、未だ人としても雛つ子、まして辯護士としても、昨今の開業、未だ湯氣の上る蒸し慢頭宜しき情態なれば、世間的には左程名が知られて居無い。けれ共今尙こびり着いて居る書生氣質は面と向つた程の者をして遠慮も、行儀も一切抜きにして了ふ位ひのおかまい無しだから、ひげ面に、辛盡嗜み占めたような他の同業者を一足

お先きに失敬して、今に、人々に十分知れ渡る時が来るであろう。

明治廿八年、日清戦争も一段落を告げて、祝ひ酒がボツ／＼醒めかゝろうとする十月、西加茂郡保見村に生れ、大正十一年三月明治大學法學部を卒業して、直に辯護士試験に當第し、善は急げの筆法宜敷く、翌十二年一月に早速開業したと云ふ極めて月並、然かも出足の頗る速い經路を辿つて居る以外は別に特筆す可き何ものもないようである。

氏は差して辯舌が功妙と云ふ程でもないが、其爲めかあらぬか、刑事事件の辯護を餘りに喜はないで、民事を得意とするように見受けられる。けれ共岡崎市内に往居して、民事だとか刑事だとか區切りつつ贅澤三昧を並べて居ては先輩を超越す事は、絶対に出来ない。凡ては八百屋主義何でも來るを拒まず引受けて、發辣たる青年の意氣を示す可く縦横に研究することである。

斯くせば、人々は氏の手軽と、無邪氣と、心の置ける性格を慕うて、來る依頼者は尠少でもなからう。殊に趣味の多方面である手前に對しても斯くせずには居られないではないか。

岡崎市 近藤周次郎

岡崎市元能見町

岡崎市の南西を流る、早川を開修して、其西岸に住宅地を作る目標を定め、一つは荒廢の地を世に

利用せしめると共に、他は市の住宅問題を解決せん理想を畫いて、機會ある毎に努力するものが近藤氏である。氏は明治十年二月岡崎市久右衛門町に生れ、高等小學校を出で、内田不賢翁の門に入り、姑らく漢文を學んだが、三十年裁判所書記試験に當第して、半生を裁判所に送ることゝなつた。而して松坂、名古屋、豊橋、岡崎等の裁判所を轉々勤務せしが、大正五年之を辞して、郷里は居を構へ、伊賀川耕地整理副組長の席に推さる、儘就任して、同事業の善處に力を盡したが、伊賀川改修工事の完成は、氏の腕に負ふた處が尠少でなかつた。後大正九年之等の功を賞するもの大を加へて、市會議員に選舉され、參事會員に選ばれて、市政の樞機に參與する身となつたが、十三年再度重望を擔つて、市會に送られ以て今日に經過して居る。目下學務委員下水道委員等の職にありて、調査研究に寧日がないが流石裁判所に居た、け法令に明く、此點では氏と四つに渡り合へるものは譯山無いようである。趣味は謠曲と園藝、但し後者はザル式なれ共、前者は相當謠へる事受合である。

菓子商 中山岩吉

岡崎市能見町

岡崎名物と觸れ出して居る鹿島屋製の煉羊羹、あわ雪、きさらき等の名菓は流石に百年の歴史を有するだけ、同じ材料で作られた品にも拘らず、他品に比して頗る風味に富んで居る。されば品評會共

進會と云つた試金石に當て、も、常に優賞を得て、他の諸品を稜想して居るのも、無理でもない。而して當主岩吉氏は百年前の創業者初代岩吉翁の孫に當り、幼より既に如上の製菓術を會得して其改良向進に努力したものである。氏は本年五十五歳、明治四年岡崎に生れて、父業を繼ぐや、名物に甘いもの無しの舊習を打破して、名實共に岡崎を代表する製菓に苦心したが、蓋し今日の聲價を得たのは此心の結晶が生んだ果實にして、其功績は實に絶大のものがあつた。總じて三代目に傑出者が出来ることは基礎確立のくさびとなるが鹿島屋も三代岩吉氏の出るに及んで内部の整理と共に今日の發展を見たのは天の配在に妙を得たものと云はねばならぬ。同時に氏は常に家業を治めるのみで無く、大正九年には市會議員に選出されて、市政にも貢獻する處が尠少でなかつた。又岡崎製菓組合長に推された時にも常に業界發展の爲めに努力したものである。餘暇に大弓を好み斯術の濫輿を極めて門人も多數を出して居る。然かも之を趣味とする處又變つた人柄と云はねばならぬ。

岡崎信用
組合長

鶴田清重

岡崎市菅生町
電話三六五番

岡崎信用組合を生んだ鶴田氏は、又育ての親としても、日夜人知れぬ苦闘の手を休めないで縦横に奔走する事を怠らない。然らば大正十三年八月一日開業して創立幾何もならざるに疾くも組合員五百

を得、預金も亦二十万圓を突破して、基礎は次第に鞏固を加へるに至つたが、同氏の努力を換算する時は當然過る程當然な話である氏は明治十年七月の生れ、家は三百五十年前徳川の初代に萬勝寺の住職と相携へて、河内の國より移住したのだから、相當に舊い由緒を有するものである。固より未だ開けない當時の岡崎に於ては、代々農を家業とする以外に術とてはなかつた。併し清重氏に至つて、醬油醸造の新事業を起すことゝなつたものゝ主として小賣營業を目的とする過程より石高も三百石内外には出てない。とは云へ勃々と湧き來る覇氣は歴々大正六年に梅酒、人參鷄卵酒の醸造を試みたが工費の点に採算とれず、己む無く四年にして之を放棄し、三年雌伏の後大正十三年遂に信用組合を起したものである。數理的に明く、打算に敏なれば、同組合の將來が氏によつて益々繁昌することは窺知するに何の難事もなさそうだ。嘗て日露戰爭に従軍し、沙河戰に参加して、敵の二個軍團に包圍された上捕虜となり、露本國メドウェイジに收容されたが、卅九年二月獨乙を經由して歸國、當時の戦功によつて捕虜となつても金章を授下された等の波瀾事がある大正五年岡崎に市制が施行せらるゝや、市會議員に押され二期を通じて議席にあつた表面に現れた闘士ではないが裏面の劃策にあつては随分やつた方である。中でも國道問題に付いては菅野氏等を向に廻し、惡戰苦闘を續けた結果初期の目的を貫徹するに至つたものである。

趣味は園藝、自らザル恭と稱して居るから何より確かなことであらう。

岡崎朝報社長
縣會議員
竹内京治
岡崎市康生町
電話二〇五番

岡崎市に於ける政黨の分野は、他の窮知を許されない、けれ共財閥が憲政會に屬する關係上、同黨の勢力は牢固たるものありて、將來何の悲觀も要しないが、他はソレも時代の趨勢によりて、盛衰交々來るから、各自の勢力を數字に上せることは出來難い問題である。

就中目下悲境のドン底にあるは何と云つても本黨にて、然かも此派城落魄に墮居しつゝ、將來の雄飛を胸に謀む竹内氏の苦衷は想象するだに一掬涙の潤む思ひがする。氏は明治二十年寶飯郡大塚村に生れ、三十八年東京中學を卒業して、二十六歳の時岡崎を永住地と定めたが、四十五年亡父竹内五郎翁の岡朝買収をきっかけに、操觚界へ足を投ずるに至つた、而して大正四年翁の他界に際して之を承繼し、今日に經過するが、岡崎一の發行部數を有するものは、流石に明治三十四年來の歴史が内在するだけに、其冠を同紙に獻げねばなるまい。大正九年市會議員に推され、十二年には縣會議員にも選ばれて、縣政に參劃して居るとは云へ、權謀術數を忌み嫌つて凡て公明正大に麒足を伸し喧々譁々の議論を奮いつゝあるが、天下が本黨に不利なる爲、他日活躍の時期を待つて居る。多くの政治家が

暗中模探を之れ事となしつゝあるが少しは氏を見習ふがよからう。

趣味乗馬と玉突、何れも月並み天狗連とは少々趣きを異にして相當の自信がありそうだ。

德倉六兵衛

幡豆郡一色町

幡豆郡一の投資者として、株券債券の利札を切ることに並ぶものな無き德倉氏は、嘗て實業界の巨頭であるばかりではなく、嘗ては地方政界の重鎮として、飛鳥を落す勢を示したこともあるけれ共明治四十年衆議院議員の選挙に、違反事件を惹き起して後は、政治的野心を一切放擲して、専ら力を實業界に投じて居る、以前は衆望の迎へられる儘に或時は郡會議員となり、又或時は縣會議員となりその貢獻したる功勞は尠少でない、されば乾分も多數に存して、目下地方政界に活躍する目ぼしき者中氏に盃を貰はないものは極めて、稀の現象であるから餘勢の大なることも知られるであらう。慶應元年三月生れ、德倉家十代の孫にて流石名望家の緒として血を引くだけに幼より凡者と趣きを異にして疾くも泰西文化にしたりつゝ、向後を實業界に投せんと目論見たものである。而して日露戦後の事業熱勃興するや、出で、電氣事業の有望なるを看取し、高電創業の仲間入りをしたものゝ、意見の相違を惹起するに及んで之を弊履の如く打ち捨て、東邦電力豊橋支店の前身、豊橋電氣株式會社の創立

を断行した。當時寒狭川発電所の建設工事起るや、半年の久しき間、工事場にて技師長と起伏を共にしたこともある。後四國水力電気株式會社、濃飛電力株式會社等の創立發起人としても尠なからざる功勞があつた外、東邦岐阜支店の前身岐阜電燈株式會社の重役を勤める際等は、同市民の電燈値下に關する民衆運動が勃發して、社長も重役も擧つて裏口より遁走せしを、氏一人止つて殺氣立つ群衆の眞只中に飛び入り之が代表と應待して無事解決の手打ちを行つた等沈勇大膽なる行動を採ることも一再ではない然らば八木平兵衛、荒川寅之丞兩氏と徳倉氏を並べて中京實業界の三人男と稱呼したのも無理はないのである。資産三百萬圓とも云ひ五百萬圓とも云ふ、所得税だけでも七千六百圓を收めると云ふから凄まじき話と云はねばならぬ。目下四國水力、濃飛電力の取締役であると共に一色海岸に十町歩の大養魚場を起して京阪地方及び名古屋方面に盛んに移出して居る。趣味は大弓にて、弓絃を切る姿勢等は四邊に並ぶものなき有様である、氏の留守師團長格にある息充治氏も仲々其道には鍛能であるらしい。因に充治氏は明治二十二年生れにて、岡崎中學の卒業生であるが、親父の政治的失敗に鑑みて幾何他の徳憑を受けても、てこでも動かさず、忠實に留守を統括して六兵衛氏に何等顧念なからしめて居るのは、良後繼者を得たものと云はねばならない。身長五尺七寸、堂々たる風彩の持ち主として、畏敬を得ること親父と變らず、尾三水力の監査役として、其將來を非常に囑望せられて居る。

徳倉廣吉

幡豆郡一色町

一色町の難治は殊更暇々するの要なきも、併し徳倉六兵衛氏か、廣吉氏が出すれば、昨日の虎、今日は變じて猫となるから、兩氏の人望も凄じきものである。併し六兵衛氏は中京實業界に雄飛して居る爲め、昨今の町長は主として廣吉氏が推されて居る關係上、氏の地方政界に於ける勢力も當ならぬものがある。同家は氏の親父仁助氏が安政元年二月、六兵衛氏の承繼する徳倉家より分家して、一家を爲したものであるが、氏の代に至つてメキメキ頭角を現して、幡豆政界に又地方實業界に於ける勢力は六兵衛氏に次いで重く、其間町長、郡會議員となつたことも一再でない。性温厚なれ共、事業に向つては熱慮断行の勇猛心豊にして、大正七八年の好況時代に、株價の上下を利用しつゝ、莫大の資産を築き上げた等も、如上の性格の由つて齎した果實であらう。現在の富百万圓を超へ、名實共に幡豆郡の巨頭たる位置を把握して居るとは云へ、個人的の接衝にも多大の人間味を有して居るから假令外官を飾る錦が無く共其位置に輕重を問はれる如きことは全然ない。鐵道の便を欠いた一色町は不遇の地位にあること久しい、徳倉氏は之れを遺憾とし、三河鐵道一色町延長には身を以て奔走努力した、近く延長の運びに及ぶんだが、その功勞の大半は同氏にあると記しても差支へあるまい。

農學士

杉浦吉右衛門

幡豆郡三和村

智識階級は郷土を見限つて、都市に永住地を設けんと憧憬する。田舎が無味乾燥となるは此爲にて又近來喧しき農村賑興問題等の由つて起る所以も、此處に胚胎するのである。然るに杉浦氏は、東京農業大學を卒業して、官途實業方面に迎へんとする手を拂ひ除け、直に歸郷して三和村に數十町歩の田畑を開耕し、以て大に農業の文化的向上に資したものであつた。當時同村に鮮人勞働者の姿を見受けたが、之等の一切は皆杉浦農場に活動するものにて、草深き田舎に迄日鮮融合の行はれたことは見通す譯には行かない。然るに世の不況と共に、都市に出稼せる小作人等は、各自故郷懐しと歸村して再度同家所有の田畑を借用す可く懇願せし爲め、折角購入せし器具を塵に塗れしむるも厭はず、喜んで彼等に望む田畑を貸し與へて、愛郷的精神の涵養に資した等、其思ひやりの深きに村人擧つて尊拜せざるものはないのである。本年三十二歳の明治二十八年生れ、代々三和村の大百姓として由緒深き家を相續した後は、村發展の實質的方面に貢獻して、餘す處がない。目下同村信用組合長の職にあるも、農村金融の圓滿を期せんとする目的の爲めに、受諾せしものにて日常勤められる名譽職等は一切辞して顧みないから凡者と同視は出来ないのである。趣味は乗馬にて相當乗りこなす技倆は持つて居るらしい。

附柴恒太郎

額田郡男川村

翁は嘉永二年ベルリの來朝と相前後して、男川村に生れたが、癡藩置縣の後に設けられたる額田縣の下に大區長の定められた時、大區長に岡崎の田中宗確が選ばれ、其副大區長に翁が推されて、共に林權令を援けつゝ、區民の利福を計つたものである。而して大區と稱するは今日の郡役所と稍々趣きを同じくしたものであるが、知多を抱合した三河を九大區に別つた關係上面積に於て郡以上の大きさがあつたのと、他は門閥の劃然區別せられる時代なれば、正副區長共に現在の郡長以上、他から尊崇せられたのも無理ではない。然かも當時僅に二十五歳の青年期にあつて、此重任を負ふた翁が新時代の少壯人を代表して大に熱を吐いたことも想像するに難事ではないのである。後行政整理の行はれるに及んで、明治十一年愛知縣廳の設けられると共に、大區制も種々離合集散されたが、姑らく經て之が郡制に改正されるや、翁は郡書記に任命せられて、一年に三段の昇進を續けたこともあつた。次いで十五年農商務省の御用係に任せられ、服部長七氏等と共に滋賀、京都、山陽、九州を巡視して西郷從道郷に献言し、又品川（彌次郎）局長に賞玩される等のこともあつたが、幾何もならずして官を辞し野の人となつて、十七年宇品築港工事に従事する服部氏を補左して其進捗を援けたこともある。當時

得たる土木の智識は遂に岡崎市の三島堤防を築く力と化して、百年の洪水を阻止した功勞は碑に刻まれたる文字と共に、永劫に消滅することはない。其後郡農會副會長となり、又三十九年養蠶の蓄財を奨励す可く額田銀行の創立者ともなつて、經濟界に貢献した處も尠少ではなかつたが、縣議員（地價を定める委員）の制度設けられるや、各郡二人宛の選良中に加つて、農村地價の公正妥當なる案出に携り、以て其職務を忠實に盡したのは、今でも當時を知る人々の一様に肯定する處である。

更に又郡會議員に選出せられることも四回、其間に參事會員、副議長議長等に推されたこともある外男川村長としても二十年、村治に貢献した功積は尠少でない。然かも村長としての全期を通じて給料の一切を懷中にせず、其悉くを部下に頒つて快とする等は、翁の人格を知るに好古の一資料ではなからうか。けれ共大正十三年一切の名譽職を辞して悠々閑日月を送つて居るが、息阜郎氏も亦翁と同じく村内の人望を一身に集めて除す處がないのは、依然血筋の然らしめる處にて、目下額田銀行男川支店長たる位置に据はり、他行に微細も隙を與へない經營振りを續けて居る。因に同家は歴代の庄屋にして、恒太郎翁は十五歳の時之を承繼したものである。

縣會議員 萩野與助

額田郡男川村

嘗て愛知縣下に於て、蔬菜の萩野か、萩野の蔬菜かどうたはれる程、此方面には拔群の技倆を有して、清洲の農事試験場に實と許されたことのある氏が、十三年の官吏生活を廢めて、大正五年現在の萩野農園を經營するに至つたのも、假る民間にあつても氏の農事方面に盡す力は尠少でない。されば男川村に永住地を定めるや、直に村長に擧げられて、農村自治に努力を續け、又郡是製糸額田社の理事に推されても農家副業の實收入を累加せしめる爲めに策謀をこらすも當然であらう。されば其手腕も徳望も遠近に聞へて、十二年縣會議員に選ばれたが、強敵候補の黄金撤布に惱まされても、蓋を聞けば壓倒的投票を集めて居る等、流石に人望の社會に透徹せるを考へずには居られないのである。當時男川村は結束して氏に投票せしが、只一票敵派の名あるものを發見した村人は、何人の投票かと其詮議立てに一騒動持ち上らん氣勢が示されたものであつた。處が何ぞ計らん其一票こそ萩野氏の投じた票と知れて今更の如く氏の人格を稱へる聲が更に大を加へる等の美談もあつたが、兎角自選を常態とする我選舉界に於て、全く普通人の出來ない藝である。本年五十三歳、額田郡宮崎村の生れにて二十五歳の時奮然安城農林學校に入學し、卒業と共に直に縣農事試験場に入つて十三年の永き間、農事

に盡したことは筆者の呶々を俟つ迄も無く、一般既に知悉する處であらう。縣會議員と成つては憲政會に屬し郡民の爲め寧日なく動いておる。

藪田 徳次郎

額田郡男川村

氏は本年五十一歳にして岡崎市の生れなるが、二十一歳の時男川に永住する身となつたもの、凡てに垢ぬけした態度は一樣に知られて廿三歳の時疾くも村會議員に選ばれることとなつた。又郡會議員村長にも推されて、郡政、村政に盡した功勞は尠少でなく、斯くて公職に拂はること二十餘年、其勢力は恐る可きものを加へて、男川村の樞機に常に參劃し、附柴氏と辨を並べて重大事項を一指頭で操つる地置を占有するに至つたものである。而して大正八年三等郵便局長に任命されて今日に經過するが、男川の通信機關を開いて、村民に便益を興ふる處、數年前迄不自由を啣ちつゝ遙か岡崎に用を足した當時を回顧して、皆一樣に無量の喜びが溢れて居るようである。趣味は書画の愛玩にて相當の自信はあるらしく、元氣も旺盛にして、心に何ものかを謀むで居るらしい。目下村民一同の尊敬を享有して其一舉一動に瞳を送られて居るのは、蓋し一夜漬りの自啓で積んだ御座なりの徳望と其軌を異にするものにて、接すれば接する程玩味す可き何ものかを潜在せしめて居るのが容易に知られて來る。

男川尋常高等小學校長
額田郡教員協會副會長

河合 和喜治

額田郡男川村

『十年一日の如く』とは、最大限度の精勤家を稱したものだ、斯程の精勤家も、河合校長の十七年間無欠勤で續けた教育振りには、土下座の禮讃を奉らすには居られまい。氏は本年三十八歳、額田郡宮崎村の生れにて、幼少の頃より人一倍の勝氣、何事に對しても、徹底を期せねばテコでも動かさないと云つた態たらしくに、近所合壁の惡太郎共は疾より氏に向つては兜をぬいたものである。四十二年岡崎師範を出で、生平小學、形埜小學に教鞭を採る身となつても、此主義は絶対に變へようとはしない。寧ろ益々色彩を濃厚にして、之に實力主義を加へつゝ盛んに先輩を稜駕しては間融を造ると云ふ仕未なれば、其進路に呆然と驚倒の送迎が繰り返へされたのも無理ではない。而して大正四年三月愈々生平校長に榮進して、内容整備に携り、五年三月泰梨小學校長に轉じては、体育に欠陥あるを眺めて盛んに運動を奨勵し、郡小學の聯合庭球大會には、優賞旗を附與さる等のこともあつた。更に七年三月、形埜小學校に轉じた時は、青年の學力に意を満たし得ざるものありて、其指導に盡した結果之も郡聯合青年大會に於て學力第一位の優賞旗を得る等、狙つて行ふ處が凡てが此筆法だから、其目論む徹底さ加減も略ぼ想像がつくであらう。後大正九年十二月豊富小學校長となつても、農業補習教

育を賑興したり、又十二年九月現校長となつても、ソレ／＼機宜の施設を爲して、其地／＼の風習に一致するよう力めて居るのは、他山の石として一度は氏の風貌に接する要がある。趣味は庭球と水泳前者は其道の剛者にして後者も亦五里遠泳の免許を有すると云ふから、依然徹底主義の生んだ果實であるが氏自身は差したる誇りも感ぜまい。額田郡教員協會副會長として教員間にも重視されておる。

醫師 酒井壽彦 額田郡男川村

氏は岡崎村の人氣醫師齊藤達枝氏の令兄にして、幼少より志を醫術に緊ぎ、或時は獨學で、又或時は京都の醫學校に通ひつゝ、孔々として研究を積んだものである。而して醫師驗定試験に當第したが特に内科に造稽深く、不治の難病を其匙加減によつて治療せしめたことは一再でない。後再度の遊學によつて眼科を専攻し、此方面に於ても一家を爲すに十分の技術を作つた。殊に男川村小學校醫として氏の來る迄はトラホームの猖獗、感染に教員生徒共何れも悩んだが、其就任を見て後の學童は如上の豫防智識を教へられると同時に、進んで氏の治療を受けれる可く疹察を乞ふた爲め、さしもの病毒も根絶して今では少く共男川一ヶ村に其影を見ない状態と迄なつたのは、記録を要す可き功蹟である。其他村衛生に盡す處も著大にして、夏期傳染病の流行する時等は、之が防備手段に寢食を忘れて立廻る

有様や搗て加ふるに温厚にして親切なる態度等は、村民を魅して、其評判のよいことは夥しい。明治十一年愛媛縣今治市に生れ、大正二年酒井家に養子となつて現在の處に開業し今日に至る。

刈谷高等女學校長 藤綱藤太郎 碧海郡刈谷町

縣下隨一の建物を擁する刈谷高等女學校の生みの親が、藤綱校長である位は誰でも十分に知つて居らう。而して目下農工商家の子女を教育す可く、特徴こそ附して居ないが「働き効のある主婦」を養成せん精神で献身努力を續けて居る。氏は一方生みの親であると同時に、又他方育ての親としても其恩恵を齊しく肝銘せねばならないのである。氏は明治十一年四月北設樂郡稻橋村に生れ、三十二年第一師範を卒業して同時に同校の訓導となつたが、三年を経て再び學を志し廣島高等師範に入つて、三十九年博物科を卒へ直に滋賀縣師範の教諭兼舎監となつた。次いで四十五年愛知第一師範の教諭に轉じ、後又附屬の主事となること六ヶ年、大正七年に岡山縣倉敷高等女學校長に榮轉して、大に女子教育の賑興に資したものである。然るに十年刈谷高女の設置議案成るに及んで、當時の刈谷中學校長原田氏は、之が校長として適材なる氏を推薦したが、肝心の本人は倉敷在住の僅々三年なるを楯に、一向動きさうにもなかつた。よつて助役と學務委員とはからめ手より之を攻落せんと遙々倉敷迄出張し

先づ倉敷町長を口説き落して其應援を求め厭や應なしに拉致し歸つたものである。而して三十万圓の大工事を起さしめて校舎の内外を整へると共に、十四年二月縣立に移管する等の活躍を續けた結果女子教育の芽生へも相伴ひ、最初六十七名の受験者に過ぎなかつたが、昨年は百八十一名に増し、現在六百人の生徒を收容する情勢と迄に至つた。性温厚にして無口の如くなれど親し味がある。篤農家として其名高き稻橋村の故古橋源六郎翁にくんどうされた爲めか人物は餘程しつかりして居る。

郡是製糸 三州社 碧海郡安城町

同社は大正十年の創立にて、當時組員は千二百人、資本金は六萬圓、安城町及び附近の農村養蠶家を以て組織されたる製糸場であるが、最初は釜數七十五個を据へつけたに過ぎず、生産額も四十万圓には出てなかつたものゝ、ソレでも奸商の出没を絶つて相當農村を潤ふしたものである。然るに其後同社の使命を体得するもの漸次に増したれば、今では千五百人の組員を有する外、資本金も八万圓を増資し釜數も倍加して百五十釜を据へつけらるに至つた。されば昨今の生産額は八十万圓に及び男女工合して二百人を數へるに至つたのも、本來の性質として當然來る可き結果である。然かも繭の共同販賣による利益の至大は、殊更岨々の要なきも之を製糸して賣却するに及んでは、數年前奸商に虐

げられたる當時と、隔世の觀を齎す程の大収入を擧げて居るのは無理ではない。殊に大正十四年の春繭に於ては、繭其儘の時價七圓五十錢當りであつたものを、製糸の後加工費を除いて九圓三十錢で販賣するの成績を擧げた等は養蠶上二割五分の増收を示したのと同量にて、以て卑益の程度も容易に知ることが出来るであろう。組員員の繭委託に對して時價の八掛けを支拂ひ、殘除を剩餘利益と共に生糸賣却の後に決算する方法にて、一口の出資五十圓、製品は神戸に移出して居るが組合長の都築重助氏が眼を鷹の如くに活躍して居る故同社の將來は益々多忙を極めることと思はれる。

三龍醫院長 醫學士 山本義治 岡崎市六名町

氏は明治二十四年額田郡宮崎村に生れ、小學時代から秀才の譽高く、遂に十王町の山本醫師に見込まれて豊橋中學に入學したが、此處でも最初から卒業迄首席をぶつ通して、天晴山本氏の眼鏡に添ふことを得た。後岡山六高を経て東大醫科に入學し、大正八年卒業と共に、順天堂病院、傳染病研究所三浦内科内蘆内博士等の下に研究すること二年半、遂に呼び戻されて三龍醫院に勤務する身となつた同時に最初の紳士協約に基いて、山本氏の令嬢に結婚したが、同醫院は夫人の姉婿山本敬三氏の繼承する處となり、よつて三龍醫院に通勤しつゝ、専ら商賣氣を離れて患者に接して居るから一般に氣受

けのよいことは夥しい。疾より醫業の國營を主張して居るもの、之無き限り開業醫の藥價を假に現在の如く十數倍にばつても己むを得ない次第と眺めて居る。而して今日勤務する處が、株式會社三龍社の姉妹系統を有するだけに、女工の保健に勉めて注意し、病は初期に於て治癒せねば如何なる名醫も手の施しようがないと教へ、其徹底を期したのが昨今漸く成熟して、今では同社に勤務するものは固より一般者も自發的に來疹する等、衛生思想の涵養にも貢獻した處は尠少でない。宮崎村一の成功者、學究的の素質を有するだけに、未來を相當囑望せられて居る。内科に於ける岡崎醫師界の權威である。

大木宇佐吉

岡崎市明大寺町

大正九年中秋の岡崎市會議員選舉に出馬して、不幸一敗地に塗れたとは云へ、人格識見共に申分の無い大木氏は必ず近き將來に、立派な選良として岡崎市政を料理することは火を見るよりも明白である。殊に氏に於て特に注目す可きは、前身が軍人であつたにも拘らず、社會に伍しては微細と雖も固陋の態度を見せない一事にして、既に之だけでも凡者と軌を一にしない点が窺へるでないか。明治四年十二月、八名郡石巻村三輪の郷に生れ、徵兵適令と共に静岡歩兵第三十四聯隊に入營して一兵卒

から仕上げた努力は、遂に三十八年少尉に任官する基石となつて、下情通の智識を振り廻しつゝ、よく義務兵の面倒を見たものである、斯くして在隊すること年餘、大正三年大尉に昇進し、姑らくして退營と共に岡崎に居を定めたが、在郷軍人分會長となる外岡崎市の學務委員となつて市教育會に貢獻した事もある。目下同邸は金山醫院の出張所となつて居るもの、閑日月を圍碁によつて送る現情は實に床しきものがある。正七位、勳五等、日露戰爭にも參加して勇名を馳せたが、笑はずとも子供の懐きそうな處町人としての苦が十分に附着して居る。

森 七三郎

岡崎市兩町

氏は明治四年六月の生れにて、小學を出たゞけなるも、才智に優れて明治三十一年には疾くも岡崎町會議員に選ばれるに至つた。爾後四十一年二月辞任する迄十一年間連續當選して、町政市政に貢獻したものである。而して四十四年には郡會議員となり、又大正八年には縣會議員にも選出されて岡崎市に於ける政治的一角の勢力となつた。されど氏は單なる一介の政治的識者と斷定し去る譯にも行かない。寧ろ實業方面により以上の手腕を有するものと見做さる可く、明治三十六年以來岡崎商業會議員に推されて今日に經過する点、及び多數會社の重役となつて居ることが何よりも雄辯に之を穿つて

居るのである。目下商業會議所常議員、東海製菓、燧洋電氣、三河印刷、岡崎殖産、大八運輸倉庫、服部鑄造等各株式會社の取締役として、西三實業界に確乎たる地盤を把握し、一方の重鎮として自他共に許されて居る。毎日お茶を同伴に過ごして居る如く乙に碎けた茶人であるが、初會者には何うも頑固の意地張りも映するのは筆者の眼が悪いかも知れない。

岡崎診療所長
醫學士

齊藤 楯 夫

岡崎市久右工門町
電話五五五番

賣春婦の存在する處に花柳病は附きものだが、扱て公娼の廢止問題が仲々解決せられざる時、せめて花柳病の傳染でも阻止せんと、目論んだのが診療所の設置であつた。而して岡崎市にも紅燈の光醉人を魅惑する際、此處にも診療所のあるは當然にて之に所長たるものが齋藤氏である。氏は明治十七年十二月、愛媛縣今治市に生れ、一高を経て京都醫科大學に入り四十二年卒業と共に、同校附屬病院に助手として三年を醫術の研究に投じた醫學士である。花柳病に對する造稽深く、西三切つて氏の右に出るものが無いと定評つけられる程なれば、四十五年四月愛知縣衛生課技師、岡崎診療所長となつて、今日に至る間の功蹟も尠少なからざる理が判明するであらう。現に一日二三時間とは云へ勤務の傍ら自宅醫院に開業して、一般患者の施術に従事して居る等も、斯かる餘暇を作り得たことは、一面公

娼の不斷に力める衛生思想の徹底を立証したものでなくて何であらう。官吏にして官吏風を吹かず、誰に接しても友人扱ひの如才なき態度に、公娼は固より、一般人にも非常に氣受けがよい。自下市學務委員、岡崎醫師會長、岡崎高女囑託教師等をやつて居るが、趣味は和洋音樂と、旅行に運動、軟かく且つ勇ましいと云ふ謎でも無からうが、三河郷友會と一般人との意志疏通を見事にして通けた腕等は相當鮮かなものである。

岡崎市會議員

都築 春 吉

岡崎市板屋町
電話三、四三番

岡崎市會議員中のやり手であると自他共に許しておるのは都築春吉氏その人である。同氏は組織立つた學校教育を受けた人ではないが、押しが強く口達者の處面白い芝居を打つておる。温厚篤實なぞと云ふものは微塵も持合せを有しておらないが、權謀術數に富んで意志の強固なあたり、轉んでもたゞでは起きない離れ業を有す。松井愛知縣知事の置土産として岡崎遊廓の移轉命令を出すや、法に不備のあるを發見し行政裁判を起して知事に對抗し、三年踏ん張り通した話などは今尙同氏の意志の鞏固である有名なる語り草になつておる。行政訴訟の結果は時の署長警視都築鈴太郎氏を仲に入れて和解し、市會に遊廓移轉救濟會を作らしめ、市に移轉地を安く買はしめて移轉を行ふなど、どこ

迄もたゞでは起きない証據立をなしてゐる。市會議員としては闘士を以て任ずるの他穩謀もやる。時たま此の穩謀が禍ひする事もあるが押しが強いだけに切つてのける。明神下架橋に當つては市議となつた畢生の事業として、表裏に亘つて運動をなしてゐるが近く實現の運びに至るであらう。板屋町の料理屋が早晚移轉の止むなきを認むるや、財閥を拉致して板屋土地株式會社を創立し、板屋町南部一帯の土地を埋立て商工の町たらしめ、居町を發展ならしめんとするなど、その凄腕は買つてやらねばならぬ。憲政會に入黨し岡崎市の爲めに利權を取るんだと云つてゐる。果して利權が得られるか如何か、今後の活動に待つことが多い。

岡崎市會議員

山内柳治

岡崎市六名町

西岡崎の發展策として、舊三島と板橋町を繋ぐ明神架橋問題は久しく稱へられし懸案である。而して之が急先鋒に當るものが、都築、長内、山内の三議員であることも今更暇々の要なきが、とり分け山内氏の努力に至つては實に物凄じいものがあるから、等閑には附せられない。氏は明治十九年の九月生れ、大正十三年上六名町の農村を代表して、適れ市會議員に當選したが、目下如上の明神架橋問題に奔走する以外、學務委員としても不斷の力を注いで居る。酒は飲めども乱に走らず、議論をやつ

て脱線もせず、農村の先覺者としては申分の無い人士にて附近に德望を集めることも尠少ではないのである。家業は農、農は國の基と見做して居るか何うかは窺知されざるも、岡崎市に於て從來動々ともせば、農村を閑却せし過程を思ひ、常に其賑興策を主張して休まないのは、選良の一人と許すに何の躊躇も要らないであらう。

岡崎市會議員

服部喜代三郎

岡崎市六名町

市會議員と云へば、酒を飲んで藝者と遊んで、果ては乱舞乱闘の隠し藝を打つものと、新聞の三面記事でよく照せられるが、服部氏に至つては如上の型を脱して、如何なる場合でも危険がない。其癖色は黒くて頑丈に淋しき野路にでも出會せば、胸をどろろかせる程の容姿を持って居るから、人は見かけによらぬものとの古諺が、今更の如く懐しくなつて來る。氏は明治十八年五月の岡崎生れ、農を以て業としつゝ、今日に經過するが、兎角農業に厭ふ若人の、轉業を阻止す可く、機會ある毎に之等の輕舉を戒めて、よく哀れ行かんとする情勢を僅でも食ひ止めたのは特筆に價する。然かも其眞面目にて、一滴たり共酒を飲まず、大正十三年選ばれて市會議員となつても、議員中での温厚者として評判のよいことは夥しい。

齒科醫 竹内武幹

岡崎市康生町
電話二八五番

康生の電車通りが無風流の軌音で慢性の神経衰弱者を作つたであろうと思はれる中に、時折尺八と瑤曲の合奏で助かるような施薬をして呉れるものがある。其御本尊は他ならず竹内氏であると聞かされては、勘の良い男達直ぐ鳴物屋のお師匠さんかと早合點しようが姑らく待て。氏は決して尺八で渡世して居るのでもなければ琴の師匠でもない。竹内齒科醫院の院主として手の冴へを凡く知らせて居る齒科醫で只尺八が好きなのだ、夫人が瑤曲の名手と云ふ立場から時に琴瑟相和せんとする機會を求めて居るのだと説明せば疝氣こそ起つても疑問等は一切氷解して了ふであらう。氏は明治二十五年十二月豊橋市の産、大正四年東京齒科醫學専門學校を卒業するや、岐阜市の鬼頭齒科醫院に勤務して一年餘、大正五年現在の所に於て始めて開業したる少壯醫師である。でも歳は若けれ腕は確實、殊に齒牙の抜去術に於ては氏の右に出るものは大してあるまい。こと程左様に此方面には特技を有し、嘗つて岡崎市内の齒科醫を一渡り荒して尙痛みを覺へた患者を、見事抜去の方法で治療せしめた一事に徴しても判明しよう。性要領を得ざるようにて之を得るも仲々掛引に富み、又理財にたけて相當の蓄財も有して居る。趣味は鳴物瑤曲何でも御座れ、之だけでも結構生活はせられるらしい。

岡崎市會議員

倉橋徳太郎

岡崎市康生町
電話八三〇番

青年子弟の教訓ともなる成功美譚中の人に倉橋徳太郎氏がある。倉橋氏は今でこそ辯護士、岡崎市會議員など威かめしい肩書の所有者となつたが、同氏が此肩書をほし、にする迄は實に涙ぐましい物語りがある。氏は岡崎市兩町に生れたが豊ならざる家庭にあつては、思ふように學校にも行けず僅かに小學校を卒業したのみである。而して十五歳いまだ使ひ歩きも祿々出来ない時名古屋へ菓子屋奉公に行かなければならなくなつた。向學心に燃えて居る氏は菓子屋で一生を朽ち果てるのを此の上もない遺憾とし、大阪に走つて裁判所の給仕となつた。之れが現在の地歩を占むる第一階梯であらうとは誰一人知る者もなかつたのも無理ではない。晝夜の區別なく勉強した賜物で給仕より書記となり仕事を終れば夜學校に通ひ、螢雪の苦學をなしたものである。十二錢の下駄を一年も履いたと聞けば如何に氏が苦しい生活を續けたか、窺ひ知らる。而して此の中より弟を齒科醫にせんと、自からの生活を切り詰めて學校にやつたなどは、如何しても美譚として子々孫々に傳へられるの要がある。弟は卒業して開業せんとする時病を得て長逝した。氏の悲しみは如何ばかりか、然し更に發奮して僅かの貯蓄を持ち、日本大學に學んで學を修め辯護士試験には、數百人の受験者中第一位を占め試験官を驚

かしたと云ふことである。郷里岡崎に歸つて辯護士を開業したが、事件に對して熱心なる調査研究は司法官の首を傾けさせ、罪になる人も幾人救つたかわからない。事件の依頼者は門前引きも切らず其収入も岡崎辯護士界の第一人者なりと、目下市の囑託を始め岡崎電燈、伊勢屋株式、千賀千太郎氏の顧問辯護士として權勢並ぶ者が無い。大正十三年初秋、岡崎市議改選に際してマンマと市會議員の榮冠を齎り得た。政治家としても尙將來がある。

岡崎倉庫株式會社

岡崎市明大寺町
電話 貳五番

岡崎市に於ける倉庫業は他に二三あつても、基礎の鞏固と沿革の古き点に嶄然一頭地を抜く岡崎倉庫株式會社の存在を何人も見通す澤には行かない。同社は明治二十九年九月、加藤善八郎、加藤賢治郎、小野權衛門、元松惣一郎、齊藤廣治、京極宏氏等の發起により、資本金三万圓の株式組織を以て創立されたものであるが、未だ倉庫業利用の念薄き時代のことゝて、岡崎銀行等の見返り品を入れるに過ぎず、又初めは同行の融通物件を目的に作られたるもの、換言せば倉庫さへ作れば一般人の物件を擔保に、金融の道を擴大すると云ふ條件で設置された關係上、假令一般的には如上の念薄く共、最初より何等成算がなかつた譯のものでもない。されば斯かる進歩した營業も、銀行との連鎖によつて

何時の間にか市民に徹し開業當初から相當の成果を収めたものである。而して三十二年には自らも銀行業務を起して他銀行同様の事業に携つたが、何うせ倉庫を利用するなれば、他銀行を経る迄も無く直接同社に融通を依頼するが捷徑として、同社と取引を結ぶものは多數を生じ、其爲めに翌三十三年には本町に出張所を設ける程の繁昌を勝ち得る迄に至つた。同時に三十四年には資本金を拾萬圓とし更に三十六年には羽根の西三倉庫を買収して、之を羽根出張所とする等、豫定の進路に何の故障も生ぜず着々歩度は刻まれたものであつた。爾後發展に次ぐ發展を重ねて四十年資本金を倍加し二十萬圓とせしが、倉庫と同様銀行業も繁昌を占めて、果ては日本銀行の指定倉庫となる等同社の基礎は益々鞏固を加ふるに至つた。而して好況時代には在庫品百萬圓を突破したこともあるが、平常は五十萬圓を維持して、ソレ以内に陥る業績等は近來極めて稀である。同時に銀行部に於ける預金も大正十四年七月現在にて二十四萬八千七百餘圓、内定期預金が十三萬四千圓あるから、諸貸附金が三十八萬五千圓に上つたとて此預金に資本金の十六萬圓を大部正金として把持する同社に於ては差したる支障も起るまい。固より資産中不動産を時價の五分の一以内に評價した事實、及び有價証券其他の物件を時價七割以内で擔保貸附にして居る經營振り等を見た時、決して不安は起らう筈がないのである。殊に信用貸附が三萬二千七百圓と云ふ僅少の數字を示す時に於て、特に其然る可きを覺へるではないか、積立金は三萬六千圓、建物は（平均坪當り二十四圓七十錢評價して）六萬圓、又地所三千坪を明大寺の

千坪と羽根の二千坪と區別しても、前者は時價百圓内外を維持し、後者として五十圓以上に評價せられるから之れのみでも優に二十萬圓の資産となるであらう。重なる入庫品は穀類、綿糸、繭等にして、配當は八朱以上一割を繋いで居るが、現在の重役を示せば左の通り。

社長 中根與七 専務取締役 千賀右次郎 取締役 清水勝次郎 早川久右工門
 監査役 千賀千太郎 元松昇藏

齒科醫 稲垣謙一 幡豆郡西尾町

兎角知識階級にあるものは、金儲けに、株、取引へ手を出したり名譽慾に驅られて、政治界に走らんとするものが可成にある。處が稲垣氏は此二つを見ること不具戴天の仇の如く、只聞いたゞけでも嘔吐を催すと云ふから變つた人である。併し齒科醫術には極めて熱心にて、研究心も仲々盛んなれば門前常に患者が殺到して應待に繁忙を極めて居るらしい。けれ共親父、夫人、令弟と氏の四人が何れも齒科醫であるから、幾何患者を持ち込んで手際よく疹察治療する故、あくび一つする要のないのは他と趣きを異にして氣持がよい。而して氏は明治二十六年生れの本年三十四歳、大正九年日本大學齒科部を卒業した新銳にて、親父の開業せる醫院を承繼し以て今日に及んで居るのである。手際は

固よりお世辞もうまいから今後共同院の繁昌は期して得らる可く其先途は餘程多忙を窮めるであらう趣味は謠曲と釣、前者は天狗連仲間伍せられても、後者の手つきは少々怪しげなものである。

タオル製造業 稲垣合資會社 幡豆郡西尾町 電話二二〇番

今日でこそ愛知縣下にタオル製織所は無數にあるが約二十年前の明治四十年頃には、木綿工場が存在を見るのみでタオル工場等稱するものは尾三織物界を通じて一つもなかつたから、驚かすには居られまい。然かも之に先手をつけたものが、稀垣合資會社の前主稲垣徳次郎氏にして、其功勞は業界史上の第一頁に燦爛として輝き、千古の後迄不朽の名を稱へられることは明白である。而して同家は六代前の祖が家を起し、三代前より木綿事業に手を染めたが氏の代に至つて日露戦後の不況時代に出會した爲め企業界が一齋に不振を續ける過程を見て、疾くも之に見切りをつけ、同時に世人の慾望從來の手拭よりタオルに移りつゝあるを看取したから、泉州方面の織物界を視察して、四十年現在の地にタオル工場を起すことゝなつた。けれ共最初の程は織工の養成其他に費用を投下する額極めて大にして、採算之に伴なはなかつたが、不斷の勇を鼓して、研究努力を惜まなかつた結果、幾何も無くして優良なる製品を作るに至り果ては四十三年名古屋に支店を設け、又横濱にも出張所を設置して、全國

的の販賣に携ることゝなつたのは、當然の酬ひとは云へ其間に拂つた苦心の程は想像するに餘がある其後需要の激増に、生品の不足を感じて他よりの仕入れを行つたが、優良品は依然同氏の手より織り出されたものにて、明治天皇、英照皇太后、今上陛下の行幸啓毎に御買上の榮に浴したことは一再でない事實が何より雄辯に、品質の非凡なるを物語つて居る。更に桑港に開かれたる万国博覽會、英京ロンドンに催されたる日英博覽會等にも出品して、優等賞を得たことは更に強く其優良さを裏書して呉れたものでなくして何であらう。然るに天何の惡戯か。歐州大戰の好況期に向はんとする大正六年氏を拉致去つて、他界に移したのは、同家にとりて此上の大なる打撃はなかつた。けれ共氏は近く來る可き黄金時代を豫想して、名古屋の倉庫に一杯商品を積載して居たのは、其逝去後に於て同家が何の狼狽もせず、安じて多大の利益を占有し、家業を整理する十分の資料となつたものである。而して之が後繼者となりて故人の意志を承繼しつゝ、今日の大を作つたものが、現代表社員岩瀬政藏氏であることも前者と共に忘れることを許さない。氏は本年三十歳幡豆郡寺津村の産にて四十二年稻垣家に店員とし這入つたが、其商才の豊なるに疾くも尖端を現して其將來を非常に囑望されたものである。然らば大正六年稻垣氏の長逝に會して末だ廿貳歳の若輩に拘らず、代表社員として何の危険もなかつたが、大正九年暴落に襲はれた時は相當苦惱を續けたらしく、今も尙當時を回顧しては時に戰慄する場合がある。同時に十貳年の關東震災にも相當の打撃を受けたが、他は貸高の二割位ひで手打ちせしも

のもあつたなれど氏は、六十日切かへの手形を振り出させて其都度一割づゝの入金を爲さしめ、一は借財の恩惠による縁故を緊いて商品の販賣を試み、他は永劫的に該貸金を回収せんと目論見た事が見事に適中して、既に半額の返済を得たと同時に、商品は従前以上に賣行旺盛を極めて居る等、手の冴へも窺知することが容易に出来る。目下最新式の原田式織機を据へつけて、盛んに製産して居るが、販路は東京、大阪、名古屋等にて、品質の聲價は過去と何等變らない。

醫師 都 築 雅 彦

碧海郡安城町

醫師は兎角肩書きを有難たがつて、検定の當第を恥ぢるのは感心した傾向でない。筆者の眼には寧ろ獨學獨歩、他と同様の位置を占たものが非常に尊く映じて來る。自ら此種の人々には頭の垂るゝ思ひもする。然かも如上の感想は、嘗に筆者獨りの專有觀ではなくて、具眼者の一致した斷定である。にも拘らず都築氏は、凡者と共に内實の是非を第二次的として形式の美醜に捉はれて居るのは何うした譯か。氏は碧海郡櫻井村の生れ、小學を卒へて後矢作の石川醫院に書生たること數年に及びしが此間玄關番から藥局の世話に至る迄一手に引受けてよくこまめに働いたものである。同時に將來の望みを刀圭界に送らんと決意したのも此時であるが、斯く目的を定めては、爾後寸時と雖も等閑に附し去

らなかつたのは無理でない。飯を食ふ時でも、机を拭く時でも、思索と研究を怠らず、専念努力した結果、遂に三十才を出でざるに、疾くも酬はれて醫師たる試験に見事當第して、獨學力行家の爲めに大なる熱を吐いたものである。以來十餘年現在の個所に開業して居るが、温厚なるとニコホン主義に冴へたる腕をつき混せて。患者に接するから一般に評判のよい事は夥しい。目下碧海郡に於ける壯丁検査の囑託醫にも選ばれて、信用を益々加へて居る外、夫人と協力して産婆看護婦の養成にも盡力して居る。

醫 師 長 谷 簾

幡豆郡三和村

氏は明治十年幡豆郡三和村に生れ、名古屋醫學専門學校を卒業して、歸郷の後姑らく親父の經營せる長谷醫院に在つて、郷土患者の脈縛を握つたものである。然るに新舊思想の衝突から、明治四十年頃交互相別れて新しく醫院を開業するに至つたが、斯くなつては大事の生命を托する過程より見て、村民達が新知識の把有者である氏に心を傾けたとて仕方がない。されば幾何も無く、今日大醫院を建設する程の多數得意を得て、日夜繁昌を續けるに至つた等も當然にて、又手の冴へも相當に見事なれば其名は次第に擴大して遠村地域から來る來診者も尠少ではなかつた。特に肺結核に對する造稽は深

く、之だけでも既に一家を爲す体にあつたが、さりとて農業地の三和村附近に、差したる患者も無ければ未だ氏の實力を發揮する地点には達して居ないようである。二三年前中島の村山家より醫專出の養子を迎へて、目下病弱より生ずる欠診を扶助せしめて居るが、合憎村山醫院の逝去によりて、茲に兩方面を兼務する繁忙を續けて居るのは聊か氣の毒の感を催して來る。趣味は囲碁にて田舎初段級と云ふから、自稱天狗のザル基連とは少々趣きを異にするものがあるようだ。

名古屋新聞
岡崎支局長

原 霞 外

岡崎市傳馬町
電話八四三番

原霞外氏と云へば岡崎市はもとよりのこと、廣く縣内外に其名を知られておる名古屋新聞の岡崎支局長であり、名古屋商業新聞社長を兼ねておる。氏の文筆は巧麗であるが、政治演説に致つては又頗る堂に入つたものであつて、中京言論界の覇者として自他共に許しておる、反對黨が反對せんが爲めの反對にて、傍聽席が騒然となつた時、之れを押へる者、中京に言論家多しと雖も、原氏を以て他に見受けぬ。財政的數字演説は低級なる傍聽者に解し難く、難事中の難事とするが、一時間半に亘つて説き去り説きすゝみ、何等の倦怠を與へないあたり、原氏の演説が如何に巧妙であるかを物語る証據となる。身長僅かに五尺目方十一貫に満たざれど、莊重なる態度と口調とは年一年と共に重味を

加へて来た。一時名古屋米穀取引界に飛ぶ鳥も落す權威を有した。米兵の長男に生れ、早稻田に學んで早く政治運動に参劃し、幸徳一派と相通じて、社會主義運動をなし、官憲の壓迫を受けて東京を去り、岡崎に足を止めたのが茲に落ち付く第一歩であつた。目下中京に多く住い、同志間に闘將と目されて重要されておるが、近來健康の勝れないのは頗る遺憾である。

新三河新聞
主筆

小田庄三郎

岡崎市本町
電話六七六番

小田庄三郎氏は號を冷劍と稱し、新三河新聞の主筆である。今でこそ岡崎操觚界の權威者として原霞外氏の如く派手な活動はして居らないが、岡崎の財閥には穩然抜くべからざる勢力を有して居る、而しその以前にさかのぼつて調べて見れば一介の書生であつた事は云ふまでもない。寶飯郡大塚の産にして、登記所の書記が社會に出た振り出しである。目下三河日報社の社長岡田氏が月刊三河新聞を發刊するや入つて記者となり、參陽新報を経て新三河新聞の主筆となつたものである。十年一日の如くと稱するが十有餘年一日の如く、同社の編輯室に立籠つて、徒らに喧々譁々の議論を弄ばないが、温健着實な筆致を以て漸進的讀者を増加しつゝある事は、小田氏に依て始めて出来るわざである。新三河の小田か、小田の新三河かと世人に評されておるが、同氏の努力を知る者は當然の事にして、何等怪しむ者がない。性温厚にして讀書を好み新刊書は必らず手に入る。氏が世上廣く通じておるのは斯ふした讀書の賜である。趣味は讀書、旅行、書画、俳句、盆栽、酒は大嫌ひにて宴會にはサイダーを用ふ。之れじや失敗のありそうな事がない。

愛知縣地方
森材會議員

山本源吉

額田縣宮崎村

山本源吉翁と云へば宮崎村の山林翁かと、山林事業に携はる者の間に知られておる。源吉翁は嘉永六年十二月額田郡宮崎村大字河原に孔々の聲を擧げ、河原の前身河邊村の村長を振出しに戸長、區長等に推され、明治二十二年町村制施行されて合併村成るや、村會議員に當選し、村長となる。同二十七年四月には村民の輿望を脊つて郡會議員に當選し、爾來幾十年或は村議、或は郡議、或は村長等の要職に當選就任し、一生を通じて公職に終始する程、自からも公職の爲めに暇を費やすを意に解せず村民又その徳を慕つて氏ならずはと、一切を氏に委したものである。現在宮崎村は五百餘町歩の村有林を有し、今後三十年を経れば、村民は高率の附加税納付をはぶける程、同村の植林事業は發達しておるが、此の發達の裏面には氏の絶大なる努力の塊まりがある。氏は明治十五年東京市に於て開かれた大日本山林共進會に出席し、殖林の有利なる事を觀察し、郷に歸つて夜の目も眠らず、村民間を説

き廻つたものである。當時宮崎村方面では肥料にする下草を得る目的を以て、山に火を放ち焼いたものである。植林の利益は草の肥料に依る利益と比較にならず、之れを阻止して植林をなさしめた當時いらぬお世話だと稱した者が、莫大なる富を増加して、其の徳をたゞへて居る。目下愛知縣地方森林會議員に推薦されてその任にあるが、明治四十三年大日本山林會第十一回總會、愛知縣山林會第一回總會等の準備委員に總裁、或は會長より囑托されておる等の点より觀察して、如何に山林事業に貢献して居るか物語れる、故に郡長、知事、賞勳局總裁より幾度か表彰されたこと何んの不思議も起るまい。今は老ひて往年の元氣ないと云へ、山林事業に貢献の功績は、又没すべからざるものである。かゝる篤農家を持つた宮崎は、その譽れを永久に誇ることが出来る。

都 築 三 衛

碧海郡明治村

碧海郡明治村大字東端に、神谷氏と並んで舊家がある。宅地一万餘坪の外に、尙一千四百餘坪を有すと稱するからには、小さい大名の屋敷位ひはある。之れが所有者都築三衛氏は明治十六年七月都築家に生れ、岡崎中學を卒業して一年志願兵となる。明治三十七年日露の國交破壊せられるに及び、第二軍に従つて出征し、轉戦よく人事を盡し勳功をたて、小尉に任官したが、不幸負傷の浮目を見るに

至つたのは、兵役が國民の義務なりと云へ、富豪の坊ちやんがのらりくらりとして居る中に、聊かお氣の毒の感がある。田畑、山林四十八町余歩を村内に有し、尙十八町歩余を村外に有して居ると稱すから富豪と稱して異議のあらう筈がない。大正六年帝國在郷軍人會碧海聯合分會長となり、村會議員學校委員となつておる外、油ヶ淵惡水普通水利組合議員、明治村青年會和泉支會長、郡農事協會幹事等にも押されて居る。性温厚にして飾らず、村民に接すること慈父が愛兒に接するが如き感がある日常餘り出入しない車引まで、都築さんは温厚な人でありまますよと云ふ、思相惡化して勞資の争ひを生ずる時、氏の如きは資産家の好典型と云はなくてはならぬ。齡四十四尙前途春秋がある。

中村平左衛門

幡豆郡平坂町

中村耕造

富豪らしい富豪として、政治界にも實業界にも何等の野心を有せず、悠々自適閑日月を共として西尾の隱宅に隱遁生活をなしておる人に中村平左工門氏がある。奥様の料理と各地の名産を集め、灘酒の豊醇に舌鼓みを打つて平和なる日を繰り返しておるが、これで一時は平坂の町村政にも幡豆郡政にも愛知縣政にも活躍したことがある。氏は慶應元年平坂町に生れ中村家に養子して四代目の當主とな

つたのである。夙に村會議員に押され村長に推薦されて、平坂村政に盡した功勞は少くなかつた。村長には三回も就任したが嫌々ながら推薦された村長であれば、三回共に任滿たざるうちに後任者を物色して辞職した。郡會議員に押されて郡政に携つたこともあつた。幡豆地方は早くより政治的競争激しく太田善四郎氏を巨頭とし、徳倉六兵衛氏が手耳を取つた太田派と、鈴木友次郎氏が巨頭であつた鈴木友派とが事毎に軌轢を生じ、幡豆郡政に面白からざる風雲があつた。極めて温厚なる中村氏は政黨の惡弊を知悉して此の禍中に入るを避けて是々非々を以て事に當つた。故に二十年前郡會議員が縣會議員を選擧する制度の時、兩派より選ばれて縣議となり沖知事の下に熱田築港改築に努力したこともあつた。期にあること短く辞任した中村氏は爾來堅く辞して縣議に乗り出さず、銳意居村の向上發展に努力した。その中でも平坂電燈の創設は、産業發展上平坂村民の受けた利益は莫大なものにして今尙その徳を慕つておる。平坂町の元老として町議の任にあれば財産の管理は息耕造氏に委して西尾に在り、餘生を平和なる極く少量の酒に委ね、悠々迫らざる生活は世人羨望の的となつて居れど、愴者の客易に企及すべからざる處である。

息耕造氏は明治二十年平左工門の長男と生れ、岡崎中學卒業後駒場農大の實科に學び、農場長の紹介で新潟縣某村の技手となり、農事指導のかたはら農村自治を研究す、二年を経過し辞して郷に歸るや父を抜けて農事に従事し、一方同志を集めて資本金百万圓の愛知産業株式會社を起し、朝鮮黃元道

に數千町歩の土地を買收し、開墾、牧畜、植林の各事業に携り殖民地で内地人の氣を吐いておる。所得稅調査委員に選ばれたこともあつたが目下は幡豆産業組合聯合組合長に推され、農村産業組合の先覺者として郡民の信頼を一身に集めるに至つたのも、亦當然過ぎる程當然な話である。短軀倭少にして肥滿した姿は達磨然たり、チンチクリンの帽子を冠つて小倉袴の姿は何處までも書生らしく、内容の整はざるのに美裝をなして、世を誤魔化さんとする輩の學ぶべき所が多々ある。不惑に達した同氏の活動は圓熟した手腕と相俟つて尙將來がある。

額田銀行
常務取締役

石田良三郎

岡崎市傳馬町
電話三〇七番

一銀行の行員に身を起し、岡崎市を中心に、西三一市五郡に亘つて金融機關の、中堅たる額田銀行の常務取締役と成た石田良三郎氏は、立志傳中の人である事は、筆者が事新らしく裏書する迄もない氏は明治十一年岡崎市に生れ、明治廿七年十七の時岡崎銀行に入り、一行員となつたのであるが、温厚にして質直、然して明晰なる頭腦は同僚先輩を抜いて同行重役より重用され、矢作支店長の榮職に就いたが、時恰も日露戦後財界不況の餘波を受けて、額田銀行も悲境のどん底に陥り、整理の止むなきに至つたので、行内更新の意味に於て深田三太夫氏入つて頭取となるや、明治四十三年石田氏を

迎へて營業事務の一切を委したのである。無口にして風彩の上らない石田氏が、同行の常務取締役の現職に就く運命を開拓したのは此の時端を發したものである。難局に立つた氏は大いに決する處あり身を以て行運の挽回に努力したが努力は無駄とならず、同行をして現在の發展を見るに至つた。若し同行にしてその功績を記さんとするれば、石田氏を於て他に見出せない。

氏は十一人の子福者にて、長女は鷹部屋博士に、次女は長谷川文學士に嫁いで幸福な家庭を作つておる、趣味は行運の隆盛を計るより他、何物もなく氏の明晰なる頭腦には行員は何れも驚いておる。

稻垣小左衛門

幡豆郡平坂町

稻垣升一郎

幡豆郡平坂町の代表的富豪はと聞けば、三左工門であると村人は答ふ。三左工門と稱する人も有りそうでなく、三左工門の何人なるを再び聞けば、即ち稻垣小左工門氏と 中村平左工門 杉浦茂左工門の二氏を合せた此の三氏である事がわかる。それだけ此の三氏の聲望は同市内に高く掲げられて居るも道理、竹矢來嚴重に結つた竹垣は一見して富豪らしい構へをなしておる。當主小左工門氏は慶應元年に生れ、稻垣家三代目の家督を相續して今日に經過なしておる。稻垣家は三代二百年の永きに亘

つておる。西尾町西の町の出らしいがその以前の事は不明である。氏は多くの人が株式に放資して比較的有利なる利殖を計るに反し、舊習を墨守して先祖傳來の地主に甘んじて居る當り、小作人はその心持ちを買はねばならぬ。然るに近來稍々ともすれば資本家をいじめるのを、勞働者の本領の如く心得るに至つては、切角不利なる地主に甘んづる之れ等の人に、嫌氣を生せしめないだろうか、筆者の杞憂であつたら幸ひである。現在平左工門氏と共に平坂町會議員の元老であるが、村議 町議たること三十餘年に及び町村自治に貢献せる、その功勞は没すべからざるものがある。其の他村長にも擧げられ郡會議員ともなり、郡内の公職は一通り推されて只働きをした。目下息升一郎氏に家計の大部分を委して、後見をなしつゝ、悠々自適の境地にある。

息升一郎氏は小左工門氏の長男として明治二十六年呱呱の聲を擧げ、日比野マラソン王の薰陶を受けて愛知一中を出で、大正五年早稻田の政治科を卒業して郷に歸り父祖の業を援けつゝ、現在に及んでおる。中學時代には走つたものでね、と云はれるのでビール樽の看板見た様な。貴下の身体で走れましかと問ふば、學校時代にはこんな肥満しては居らなんだと釋明される。それだけ風彩は堂々たるものである。目下西尾鐵道の監査役として、同社の趨機に參與して居る他、幡豆郡農會の副會長として、郡農事方面に對する功勞も尠少でない。同郡に於て將來政治家として立つ人は、升一郎氏だろうと徳倉充治氏は語つたが、前途春秋のある同氏は郡民に期待される處が多い。趣味は謠、觀世梅若流

をよくし、青年と一つしよになつて庭球もやる、酒は相當に呑める方である。

神谷 八郎

碧海郡明治村

前縣會議員郡部會副議長として愛知縣政に重きをなした人に神谷八郎氏がある。氏は明治十年十月碧海郡明治村大字和泉に生れ、學を了へて郷に歸るや齡二十四にして村會議員に推され、現在に至る迄止める事の出来ない程村内に衆望を帯んでおる。碧海郡郡有數の富豪にして邸宅の如き一萬七千余坪と外に、九千六百余坪を有する殆んで城廓の感がある。所有田畑の如き村内に四十六町歩ある他に六十五町歩餘を他町村に持つて居る等の点より察して、如何に富豪であるか窺ひ知らる。また其の他有價証券はどれだけあるか知れないと云ふのだから恐ろしい。碧海郡農會會長の名譽職を始め明治村々會議員 明治村農會評議員總代 明治用水普通水利組合會議員油ヶ淵惡水普通水利組合會議員 縣農事協會幹事等の名譽職に現在携はりつゝあるが、曩には郡會議員となり縣會議員ともなる。氏は最も新らしい知識の所有者として或は農業方面に、或は政治方面にその活躍した舞台は廣ひ。然し神谷氏はひとり政治界方面のみではなく、碧海銀行創立にあつたはその發起人となり、碧海の事業界に貢獻せるその功勞は莫大なるものである。金椽眼鏡越しに見る眼光はけい／＼として、人を射るの感がある

る碧海郡の重鎮として同氏の活躍に俟つことが多い。

名古屋銀行西尾支店

幡豆郡西尾町
電話二三一番

幡豆郡一の都邑、西尾町の金融界を、明治、岡崎、額田三銀行の陞漸下に置くことは、中部日本の銀行界に覇權を握る名古屋銀行の到底忍び得ざる處にて、此小癩なる振舞に一泡呉れんと大正十四年六月一日にバツと覆面をはねて現れ出たのが、鉄筋コンクリートの大か同行の西尾支店である。固より目下建築中にある名古屋廣小路の本店銀行程金模は大でもない。又傳馬町の本店に於ける目廻るしき業務の繁忙振り等も決して此處では味へない。けれ共這入つて明るく、出るに氣持ちよく夏季に送られる煽風氣の涼味や冬期に導かれるスチームの暖房等がソレ／＼客人に好感を與へて居る万善の装置は西三切つての何れの銀行に求められるか。然かも行員一同顔を崩して顧客に接する態度等はお世辭にしても餘りに技術が秀で、居る。之では他の二行が尠ならず脅威を感じるのも無理からぬ處にて内心恟々を感じるのは必然である。されど明銀と云ひ、岡銀と云ひ何れも本店こそ他にあるが、前者は西尾銀行の合併によつて置かれた支店であり、後者も隣接地區から据置された股体であるから、土着銀行としての強味が其間に十分ある。然るに名銀支店には之が無い。流石海山千年の支店長長谷

川富三郎氏も、此点には相當苦心をして居る模様らしく、又土地の事情を闡明せずして、經營の最善も盡されねば目下行員は何れも不眠不休の決意を以て、銳意取引者の各内情、習慣其他の資料を集めるに寧日の無い有様である。されば此願望も不日達成せらる可く斯くなりたる後の同行が大道濶歩するは火を見るよりも明白にてそれこそ他行の恐る可き大敵國を完全に形成するものと思はれる。而して親切と確實とは本店の標語にして、支店に之の無かるう筈はなく一度扉を開いた時、其空氣の容易に看取せられるは誰にも一樣に抱かれる見解であらう。併し開設後半年を経たる今日なれば預金は他行に比して尠少なるを免ぬれ共、そは今日の事情にして、此處數年を経たる後の同行が、何れ程之を掻き集めるかは興味の多い問題である。創立は明治十五年現在の總資本金は貳千萬圓に達し、壹億壹千八百餘萬の預金を吸集し貸出し又七千餘萬圓に及んでおる。金利のつかぬ積立金を七百貳拾萬圓も有しておると稱するからには、如何に同行が堅實で、利益を擧げ得るか、察知せられるではないか因に同行の沿革を調べて見るに、明治十五年中京實業界の有力者に依り資本金二拾萬圓を以て、營業を開始されたのが第一歩であつて二十七年には五拾萬圓に増資し、爾來四十餘年間に五回の増資と合併に依る増資三回をやり、他銀行の營業を譲り受けたるもの六行に及び現在の發展を見るに至つた。而して公債、社債、有價証券、預け金、現金等で支拂準備金が七千餘萬圓に及んでおるから手堅さ加減も想像がつく。目下名古屋を中心に中部日本は勿論の事東京、大阪にも支店を出して名古屋人士の

氣を吐いておるのは頼母しい感がある。同行の頭取は恒川小三郎氏、西尾支店長は長谷川富三郎氏である。氏は頭腦緻密營業振堅實にして、敏腕の聞えが高い。

丸石合資會社

岡崎市兩町
電話四五六番

清酒「金長譽」「長譽」「三河武士」の名は、愛酒家として殆んど知らぬ者が無い位ひ、その聲價は市場にも高ひ。酒は灘酒に限るとはそれは以前の話しであつて、釀造法の進歩せる現代には、熱心に努力すれば決して遜色のない酒が出来る。同酒は岡崎市兩町、丸石合資會社の釀造に成るものであつて、本縣内は勿論の事、遠く静岡方面に販賣の手を延ばしておる。同社は目下岡崎市の本倉と、灘の出倉との二倉庫を合算する時は、四千石以上を醸し、愛知、三重、岐阜、静岡、長野、新潟の六縣下の酒造家中、釀造石數に於て第六位を示して居るが、



こうした域に達する迄には、矢張り並はずれた、苦心の結果である事は、申す迄もない。同社は以前元松家三代前の當主惣一郎氏が、酒造業の將來有利なる点に着眼し、開始したのに端を發し、二代目半彌氏の時代に至り、深田本家の酒造部を合併し、深田一統を網羅し以て合資會社に組織を改め、現在の發展を見るに至つたのである。縣内幾百の酒造家中、灘に出倉を有するのは、丸石のみだと萬乗の氣焰を擧げて居るが、それは一朝一夕に作り上げたものではない。目下同社の代表社員は元松昇造氏であるが、醸造より販賣、店務の一切は深田定治氏の双眉にある。定治氏は渥美郡の産、深田源藏氏方に入つて次女の婿となり、丸石の經營を一手に引受け、現在に經過しておるが、丸石の酒は悪いと云はれた時代より、困苦精勵、醸造に大改良を加へて現在の聲價を擧げ、販路を擴張して同社の繁榮を計る等その功績は没す可からざるものである。地元若宮町は氏を市會議員に出さんとし、賞揚極力つとめたが、商人と政治は別個の者でなければと云はぬばかりに頭を横にふつて應じない。氏は腐敗墮落せる政治に携はるより、『長譽』や『三河武士』の聲價を高めるのを見る方が、餘程樂しみであるらしい、前途尙春秋がある。

新三河新聞社長 手島喜代三郎 岡崎市籠田町
電話七二九番

新三河新聞は岡崎最古の歴史を有し、それだけ市民の信任を厚くしておる。地方新聞は其の多くが經營至難のあまり、稍々ともすれば徒らに過激なる文章を掲げ、販賣上の政策となし、廣告強請の道具とする中に、之れは又温健着實振りを發揮して、報道、評論の使命を果しつつあるものは、獨り同紙のみであつて大いに敬意を拂ふ資格がある。同社の社長手島喜代三郎氏は、半次郎氏の長男に生れ半次郎氏が政治運動の補佐役として、設けたる新三河新聞を繼承して社長となり今日に經過するが、同氏は新聞を發行するばかりでなく、岡崎活版所を設け、岡崎市、額田郡は勿論のこと西三の諸郡に亘つて、廣く一般活版印刷の需めに應じておる。

町會議員、市會議員等にも選ばれ樞要なる位置に就て、町政市政に貢献した功績も亦相當にある。人を信ずれば一切を委せる性質にして、新聞の製作、販賣より、印刷方面の業務一切は、擧げてそれらの社員に一任し、時折り出社して大綱を總ぶるにある。目下岡崎商業會議所の議員であるが、未だ老ひたるにあらず市政に乗り出して、牛耳を取る時もあるう。

三河日報社長 岡田太郎次郎 岡崎市若宮町
電話五二四番

岡田太郎次郎氏と稱するより、岡田撫琴氏と稱した方だけ人に知られて居るかわからない。本

年取つて五十二歳、長身瘦軀を忙がしそくに、東に西に、南に北に飛び廻つておる。政治運動は三度の飯を二度にしても好きな程、政變來つた岡崎市の政治運動に、氏の顔を見ないこまがない。と云つて表面に立つて堂々、言論を以てやり得る人ではないが、賢謀術數に富み、穩然その勢力は四方に及ばし、抜くべからざるものがある。その以前二校派と三校派の戦ひは、近代稀れな大騒を生み、數十名一齊に投獄の浮目を見た。氏は此の騒動の頭領にて、一部少數の者を引具して善戦能く勤めた結果、多勢を頼んで町政を弄ばんとした反對派に、犁肘を加へた話などは、今尙有名に残されておる。市議、縣議若し氏が出馬するなれば、殆んど無競争で當選確實であるが、自から出て動くより、出た者を使ふ同氏の主義は、何程勸めを受けても頭をたてにふらぬ。そこに又同氏の優れた處があるのかも知れぬ。

憲政會のちやき／＼にして、撫琴氏の名は中央地方によく知れ渡つておる。酒を取つては豪の者、深夜呑み明かしても翌日何んの影響を感じないあたり、全く酒豪と稱して過言ではない。書をよくし俳句、和歌をものする、氏の画は相當なる價格で賣買され、年に一回位ひ画會をやつて同好の士に頒つておる。左に掲げたものは最近筆者に與へられたものである。武骨張つた政治運動をする同氏にも斯ふした柔しい處のあるのは聊か不思議の思ひがする。日刊三河日報を發刊して社長であるが、自か何にも知らぬ社長であると稱しておる。道理で社務の一切は支配人に委せ、画筆に親しんでおるあ

たり、奥ゆかしいではないか。

自嘲

生きて世を のらりくらりの なまこかな

岡崎裁縫女學校長

白井孝

岡崎市傳馬町
電話七六七番

岡崎裁縫女學校は校主白井孝女の、苦心經營の塊りである事は、筆者が茲に紹介するまでもなく。世間周知の事實である。自由黨に屬し、村松愛藏氏等と國事に奔走した、白井菊也氏の妻女であつた孝女は、今より三十年前、年三十七にして長逝した夫菊也氏の遺れがたみ、三人の幼兒を抱いて年廿九の時一本立ちとなつたのである。今後の處世を如何にするかは、孝女ならずとも當然起る可き問題であるが、同女も亦物心つかない三人の幼兒を抱いて、幾夜か枕紙をぬらす悲哀を舐めた。子供の安全な成長は、獨立獨歩より他に途がない。再縁を退け東都に出で、渡邊裁縫女學校、堀越和洋裁縫學校を卒へて、第二師範附屬小學に奉職中、女子は何時こうした不幸の目に遇はぬとも知れぬ。女子の獨立は裁縫によるを最も臆計と考へたのが、岡崎裁縫女學校創設の動機となつたものである。然し高が知れた女の瘦腕であり。搗て加へて物質の背影もなく、經濟的壓迫は豫記に反したが、意を決した以上、運命と生死を共にすべき大決心を持ち、明治三十九年六月岡崎市連尺新町に、同校の誕生を見

茲に績年の目的を貫徹した。後梅園町誓願寺東門前に移轉をなし、更に大正六年九月現在の位置に移轉をなし、校運も漸次發展を告げるに至つたが、此の間の苦心は到底拙劣なる筆者の、容易に書き現はす事の出茶ない、結昌であつたことは申す迄もない。

女子の淑徳涵養、適應な技藝と須要學科（特に裁縫家事）一家の主婦としての完成、裁縫科教員の養生等を教科主眼とし、九名の職員及び講師は、一身同体となつて百五十名の生徒に主婦として恥かしくない教育を施しておる。同校は本科、師範科、速成科の三科に分ち、師範科卒業生は専科正教員の免許状を得られるの特典があれば、同校卒業生にして教職に在る者も相當にある。同校が目覺ましい成績を挙げ來つたので、岡崎市は年々三百圓宛の補助金を交附し、間接に援助をなしつつあるが斯く社會的に見認められる迄には、孝女がどの位苦心をしたかは、ほゞ想像が出来るであらう。

岡崎公設消防組頭
岡崎市會議員

小原善太郎

岡崎市康生町

岡崎市會議員の小原善太郎氏は、明治十五年六月岡崎市久後崎の、餘り豊かならざる家に生れ、叩大工の弟子にやられたのが、現在成功を勝ち得る階梯であつた。十年困苦すればと稱するが、小原氏の苦心は十年十五年の苦心ではなかつた。困苦能く耐えた賜で、漸次信用を増すに従ひ、少しづつ、

受負業に手を出した處、實直にして能く働いた爲め。信用が集り資金が出来、遂に現在の如く、手廣く事業に携る身となつた。事業が齎らした結果でもあるまいが、俠氣に富んで人の世話をする、金を惜まらず暇を惜まらず、同氏の世話に成つて今尙感泣して居る者が澤山あるようだ、僕には岡崎一萬餘戸に對する、火災安全を保証する責任があると、能く口にするが、チャン／＼と鳴る火災報知の鐘を聞けば、大乃先三寸にして身を交はず、武士の魂のその如く酔魔深く襲はれた時でも、むつくと起きて飛び出す程、その熱心は買はねばならぬ、岡崎市一千に近ひ消防組の組頭として、向ふ見ずの意氣で立つ、消防組に波一つ立たせ無い處に氏の身上がある、岡崎市會議員としては、次期交替の參事會員に、擧げられる事に決しておる、受負業者としては、日清紡績の岡崎工場に出入して、西村工場長より絶大な、信用を得て居る模様である、趣味は酒と義太夫、前者は仲々の豪のものであつたが最近スツカリ禁酒した、後者は天狗連に屬しておるのか、筆者はその点を聞き漏した。

岡崎市會議員

西尾万五郎

岡崎市十王町
電話六六八番

岡崎市會議員中には、土木建築の受負を本業とせる者が二人居る、一人は小原善太郎氏であり、一人は西尾万五郎氏である。西尾氏も小原氏と同じく、現在の市會議員の椅子を齎し得る迄には、人並

以上苦心をなした賜である。明治三年七月、此の世に飛び出したのをきつかけに、小僧奉公で荒波の若を舐めたが、倒れても尙止まないの發奮心は、自重をなして仕事を誤魔化さず、眞面目な工事受渡は後日に至つて尻が來ず、建築は西尾氏でなければと云ふ、信用を得るに至つたものである、十三年の初秋市議として立候補するや、深田三太夫氏の如き、同氏に多大の援助を成したるが、深田家の建築事業一切は、西尾氏でなければ渡さぬ等の点より考察して、不正者の多い受負者の中に、如何に信用されて居るか窺はれる。

受負に携はる者の中には、随分粗暴な者が多い、然し同氏に限つて決して粗暴に走らず、温厚にして正直近來珍しい人である。俠氣に富んで居る事は、同業に關する者の通有性か、氏も人の世話は、その勞を惜まない一人である。市は色々の事業をやる、之れを決議する市會議員には矢張り各方面の人があつた方、どれだけ参考となるかも知れぬ、市會には必要な人物である。

岡崎市會議員 小野金左工門 岡崎市 中町 電話六〇八番

小野金左工門氏は、明治十一年も押し迫つた十二月額田郡福岡に呱呱の聲を擧げ、幼時父に伴はれて、岡崎市に移住し、多少身上の變遷を経て、席貸業を始めたものである。先代は郷里で庄屋をつと

たと、稱するからには相當な家柄であつた事は、説明するの要がない。温厚にして策があり、無口にして要を得てくる、無爲無策に見へて居て、仲々賢謀に富んで居る。

東遊廓土地株式會社の取締役であり、藝妓置屋の組合長にも推されて、廓方面に重きをなして居る。岡崎市會議員に推されるや、參事會員に選舉される程、議員間にも餘程信望があつたが、營業が悪いと問題を起した者があり、一年にして辞して平議員となる、然し參事會員に有ると、あらさると其の勢力に何等變りがあるや、東部議員を糾合して、明神橋架橋に對抗して、吹矢橋架橋を建議し、寄附を取り纏めて架橋を強要する等。僅か経過した跡を辿つて見るに、仲々見るべきものがある。尙任期二年ある、ぐづぐづしたような顔付きをして、一層活躍を見る事が出來よう。趣味は囲碁、市會議員となれば吞まねばいかんげな僕も大分修業が出來たよと、當初一二杯より吞めなかつ氏も、最近は大分吞めるらしい。

西尾鐵道株式會社

幡豆郡西尾町 電話三七番

岡崎市と幡豆郡との、唯一の交通機關は西尾鐵道である。最も小規模な舊式の輕便鐵道であるが爲め、郡の産業發展を阻害すると、郡民からは惡口を叩かれて居るけれど、ガタ馬車で運んだ以前の事

を思へば、郡民に與へた利益は莫大であると、重役に力まれても致方があるまい、然し目下電化の工事中であれば、完成の近きことは明白であり、發展の障害は電化實現と共に取り返すのだとは、重役の説明を待つ迄もなく、筆者が保証しても差支あるまい。

同社が呱呱の聲を擧げたのは、明治四十二年であつて、四十三年の二月西三軌道株式會社なる名稱のもとに、資本拾五万圓を以て創立された、當時の發起人は岩瀬彌助、糟谷縫右工門、岩瀬一次、鳥山傳兵衛、鳥山武平、鈴木友次郎、早川休右工門、畔柳八十次郎等の諸氏であり、西尾、岡崎間の交通運輸の便を開始したが、後四十五年一月に至り、西尾鐵道株式會社と改稱し、同年五月には資本金も倍額増資して參拾万となし、大正二年平坂延長線の免許を受け、同三年十月には、營業開始を見るに至つた。同四年六月、更に資本金を五拾万圓に増加なし、五年貳月には吉田線を全通せしめて、同社の鐵道網は全く完成した。八年九月三回目の増資をしたが、十二年九月電化實現を前提とし、二百萬圓増資を實行した。

鐵道經營は十年計畫を以て進むものであると稱されるが、西鉄のみは開業の當初より一割より二割近く、高率の配當をなし爲めに株式は、莫大なるプレミアムが付いて、買手ばかりだつた等の点より考察して、如何に必要な線であるかも想像が出来よう。

社長は創立當初より岩瀬彌助氏就任し、技術者のやるような處まで立入つて、一切を處理し成績の向上につとめたが、その功績は顯著である。十一年八第功逐げて辞任するや、現社長の鳥山武平氏就任して、今日に及んでおる。外山勘一氏は、明治四拾五年二月より、大正五年二月まで常務取締役となり、糟谷八郎右衛門氏は、五年二月より十三年七月まで、支配人の要職にあつて社長を補佐し、萬遺憾なきを期したが、糟谷氏は十三年七月、病の爲め遂に倒れ、颯田京平氏十四年一月入社し、同十一月支配人となつた。

鳥山社長は、西尾町の老舗河内屋呉服店の店主であり、温厚にして無口なるだけ敵がなく、内外に評判がよいらしい、颯田支配人は、第一師範出小學校に教鞭を取る事正に十五年、養鶏業に志す處あり、末練もなく執着もなく、さらりと辞表を投げ出して、養鶏業の研究に没頭したが、糟谷氏を失つた後繼支配人の交渉を受け、東海十一州養鶏大會を、最後の土産とし現職に就いたのである。人格圓滿にして相當實力がある、鳥山社長を援けて電化實現に大童となつておる。年四十二、今が働き盛りであり、今後の同社は氏等に負ふ處が多々あろう。

石炭商 川部安次郎 幡豆郡平坂町

幡豆郡平坂町川部石炭店の取扱炭は、品質が優良で、比較的低廉であると云はれ、顧客は廣く西三

一市五郡に及んで居るも道理、石炭界の饒將、神戸の金辰商店得意の起行粉、豊國粉である事を聞けば、多少斯界に眼色のある者であつたら、多くを聞く迄の要がない、店主川部安次郎氏は明治二十二年平坂町に生れた、同四十二年兄準一郎氏が、同町で石炭販賣業を開始したが、斯業に携はる端著であつた健實が生んだ賜で、店運も日増に榮へ行つたが人生の行路には計り知れない大きな魔の手が待つて居る、大正三年春半不幸の魔の手に襲はれて、兄準一郎氏は若死した、一家の悲しみは云ふ迄もなかつた、漸く著につきかゝつた同店の事業を顧みる時、安次郎氏は呆然自失せん許りに悲しんたが、忘兄に忠實なる餞別は、店運の發展を計るより他に途がない、決然起つて遺業を繼ぎ現在の發展を見るに至つた此の異例の發展に驚くものがあるかも知れぬ然し利益を薄くして、確實なる品を販賣した事を考へれば當然過ぎる程當然の話である。

性極めて淡泊である、其の証據には遺産處分などで、見憎ひお家騒動などをさらけ出す世の中に、獨り同氏のみは親戚の處分に委して口一つ出さざる當り全く見上げた者である。夫婦の中は極めて圓滿であり、一人の老婆に孝養怠りない、妻帯以前には花柳界にも足を入れた然し妻帯と同時に、すっかり捨てて顧みない、そこが眞似の出来ない處ではないか。

柴田徳松

岡崎市中町
電話三四三番

書畫を弄ぶのは、富豪の道樂となつておる、道樂としては二つとない高尚な道樂である、柴田徳松氏も、此の道樂にかけては人並以上の所有者にして秘藏の古畫は、長持に幾棹となく藏されて寢た間も忘れる事の出来ない愛がんで受けておる。

柴田氏は現在でこそ、岡崎市に住ひ、その住人になりますして居るが、明治八年三月十九日、奈良縣磯城郡三輪町に呱呱の聲を擧げたが都合上岡崎市に移住して、明治三十年、二十三歳の時額田銀行に入つて行員となり、同四十二年迄、十三年の永き年月、物堅い銀行事務で暮したものである、十年一日と稱するが、十年以上を行内で暮した氏も家政上の都合にて辭職を成したその後は専ら自家營業に没頭するを得たけれど、趣味の書畫は決して離さない相當に學識もあり經驗もある、搗て加へて温健であつて敵がない、周囲の人に推薦されて東遊廓土地株式會社の役員となり席貸組合の役員を兼ね、町總代を仰せつかる等、報酬の無い仕事を持ち込まれる、それだけ重きを置かれて居るのだから仕方がない、次期は市會議員として打つて出づる氣か本人の意嚮如何に依つては勿論結束が出来るであらう、歳五十二、まだ一働ける。

志賀壽太郎

幡豆郡豊坂村

幡豆郡豊坂村六ツ栗の道路より、上をあをげば密林中に巍然と立つた屋の棟がある巾廣く開かれた小坂を登れば、此の玄關口に突きあたる大名華族の屋敷ならずば、郷士、富豪の屋敷である事は一見想像に苦しくない之れが即ち幡豆郡の富豪として其の名を廣く知られたる。志賀壽太郎氏の屋敷である春光麗かな陽春の候、若し同家を訪づれるなら歳老ひたる櫻花爛漫たる中、高らかに鳴く小鳥の遊び戯れる様を見受けよう都會より田舎へ、のんびりした生活を需めんとする人は新居を需めて移り變つて行くのも道理、生存競争の表裏に立つてこそく出来た筆者でも、こうした邊境に生活をするなら多少のんびりした人にもなろうとは、同家を訪問した時に熟々感じたが、之れは獨り筆者のみの言でもなからう。

志賀氏は同家十四代目の孫であり、明治三年五月呱呱の聲を擧げ、四百年の歴史を有する同家十四代の當主となり今日に經過なしておるが今日に及ぶ迄には、或は豊坂村の爲め或は幡豆郡の爲め幾度か公職に關係して努力した功績は莫大である殊に著るしいのは、四五の同志と相計り、幡豆製糸株式會社を起し、製糸事業の發展を計り郡内の養蠶業を盛ならしめたその功績は殊筆大書の資格がある。

西三の事業と人 (終)

大正拾五年參月拾八日印刷
大正拾五年參月廿八日發行

定價金拾圓

不許複製
西三の事業と人

著者 岡崎市魚町八拾九番地 原 卯三郎
 發行人 岡崎市魚町八拾九番地 稻垣 久吉
 印刷人 岡崎市魚町四拾五番地ノ一 木 俣 榮 治
 印刷所 岡崎市魚町八拾九番地 西三新聞社印刷部

發賣元 西三各地の書籍店で販賣致して居ります

發行所

西三新聞社

岡崎市魚町八拾九番地



終